『オデュッセイア』第８巻の問題[1]

安村　典子

『オデュッセイア』第８巻において、パイエーケス人の王、アルキノオスの宴に呼ばれたデーモドコスは、オデュッセウスを前に３つの歌を歌う。第１の歌はトロイア戦争における勇士らの勲しのうた（６２－８２）、第２の歌はアレースとアフロディーテーの恋愛（２６６－３６６）、第３の歌は、オデュッセウス自らの所望による、木馬の歌（４９８－５２０）である。第１と第２の歌の間には、パイエーケス人の若者たちとオデュッセウスによる運動競技のエピソード（１０４－２３３）が語られている。これらの歌や物語は従来、『オデュッセイア』の筋とは本質的な関わりをもたない、娯楽的な要素の強い挿話として取り扱われることが多かった。しかしながら物語の「語りの手法」を検討してみると、これらの３つの歌は互いに関連する糸で繋がれており、また更に『オデュッセイア』全体の主題とも、深く関係していることがわかる。

『オデュッセイア』の重要な主題の一つは、困難な状況や強力な敵に対して、オデュッセウスが智慧（策略）と勇気で勝ち抜く、というものである。この主題は、更に細分化すれば、「策略による勝利」と、「弱者が強者を凌ぐ」という二つのテーマとなる。『オデュッセイア』前半（５－１２巻）の冒険物語においては、この主題は明確に提示されている。たとえば巨人ポリュペーモスの物語においては、日本の一寸法師の話のような、弱者が強者を策略によって打ちまかすモチーフが見られる。後半（１３－２４巻）のイタカ島における求婚者殺りくの話においても、このテーマは一貫して貫かれて

---

[1] 本稿は、『言語文化論叢』第２号（金沢大学外国語教育研究センター、１９９８年）に英文で掲載した拙論「The Second Song of Demodokos in the *Odyssey* 8. 266-366」に加筆、修正を行ったものである。尚、本稿における『オデュッセイア』からの引用は、松平千秋訳による。

いる。多勢の求婚者たちを敵にまわして、無勢のオデュッセウスがいかにして思いを遂げ、勝ち抜いてゆくか、という問題を軸にして物語が展開しているからである。いま一つの『オデュッセイア』の重要なテーマは、オデュッセウスの正体、アイデンティティーの問題である。多くの冒険物語の中で、彼は見知らぬ旅人としてふるまっており、彼の名前は長い間伏せられたままである。すでに多くの研究者によって指摘されているように、『オデュッセイア』の序（１巻１－２１）において、彼の名前がようやく２１行目になって初めて語られるのも、オデュッセウスの正体をめぐる問題が、この叙事詩にとっていかに重要なテーマであり、彼が容易には正体を明かさない人物であることを象徴的に物語っているといえよう[2]。前述のポリュペーモスとのエピソードでは、オデュッセウスの偽りの名前、「ウーティス」が、この話を成立させるための不可欠の要素となっている。また、後半の帰国後の物語でも、突然現れた乞食を、誰が始めにオデュッセウスと認識するのかという興味、その真実が徐々に明らかにされてゆくサスペンスが、話を盛り上げてゆくのである。本稿では、『オデュッセイア』全体を貫くこれらの重要なテーマ－－－（１）策略の強調、（２）弱者による強者の打倒、（３）オデュッセウスの正体－－－が、デーモドコスの３つの歌を中心とする８巻に、明確に反映されているということを考察し、これらの３つの歌が決して叙事詩の本筋とは関係のない「余興」ではなく、むしろ実に巧みに、『オデュッセイア』全編の主題を指し示すものとして語られていることを明らかにしたい。

1

まず第１の問題、すなわちデーモドコスの３つの歌が、それぞれ策略というモチーフで貫かれていることを示したい。始めに、第１と第３の歌の連関について考える。

---

[2]周知のごとく、『イーリアス』において、主人公アキレウスの名前が第１巻１行目に語られるのと、明確な対比をなしている。

第１の歌において、デーモドコスが「勇士らの功し」（κλέα ἀνδρῶν, ８．７３）を歌うように要請されて語ったのは、オデュッセウスとアキレウスの喧嘩の物語であった。

> [デーモドコスが]うたった条りは当時その評判が広大な天にも届いていた物語の一節で、すなわちオデュッセウスと、ペレウスが一子アキレウスとの争いの物語－－－かつて二人が華やいだ祭りの席上、激しい言葉で言い争い、総大将アガメムノンは、アカイア勢の大将同士が仲違いするのを見て、心中ひそかにほくそ笑む。かつてピュト（デルポイ）の聖地で、神託を請うべく石の敷居をまたいだ折、ポイボス・アポロンの下された託宣の告げた通りになったからで、それはあたかも大神ゼウスの計らいによって、トロイエ人とダナオイ人との頭上に、禍難の発端が降りかからんとする時であった。（８．７４－８２）

この喧嘩の詳細が語られていないのは、７４行にあるとおり、当時の聴衆が内容をすでに知っていたからであろうと、考えられている。喧嘩の理由については、『オデュッセイア』では何もふれられていないが、２つの可能性が考えられる。ひとつは『キュプリア』にある物語で、ソポクレスの『シュンデイプノイ』（断片５６２－５７１　Pearson）に取り上げられている話である。すなわち、トロイアへ向かう途上、テネドスで、宴への招待をめぐってアガメムノンとアキレウスが喧嘩したという話に基づく、との説である。この宴にはオデュッセウスも招待されていたとみられる（断片５６６）。しかしアキレウスの喧嘩の相手は、この話ではアガメムノーンであるから、これが第１の歌で語られている「喧嘩」に該当する可能性は少ないと言えよう[3]。

第２の可能性は、『オデュセイア』８．７７につけられた古註（Scholia BE ad Od.8.77）である。それによると、トロイアを攻略する方法について、アキレウスとオデュッセウスが喧嘩し、アキレウスは勇気（ἀνδρεία）、オデュッセウスは策略と智慧（μηχανὴ καὶ φρόνησις）による勝利を主張したと

---

[3] Pearson (1917) 199 も、"the banquet at Tenedos must not be identified with the occasion briefly described in *Od.* 8.75-82."とのコメントを加えている。

いう。「アカイア人の優れた勇者が喧嘩すれば、そのしばらく後にトロイアが滅びる」という神託を得ていたアガメムノーンは、このふたりが喧嘩したのを喜んだという話である。この古註の信ぴょう性については、疑問を呈する研究者もいるが[4]、次のような点は、古註の正当性を強めるものであろう。すなわち、

（1）武力と策略との対比は、ホメロスにおいて繰り返し言及されている問題である。たとえば『イーリアス』７．１４２では、ヘクトールと大アイアースとの決戦の後、ネストールが「リュクルゴスはアルカディア人を、力を用いず、計略で打ち取った」と語る。『オデュッセイア』９．４０８では、ポリュペーモスが「暴力でなく、企みでおれを殺そうとしているのは『ウーティス』だ」と語る（下線筆者)。このように武力と策略の対比は、『イーリアス』、『オデュッセイア』両叙事詩の中で何度も問題にされている。したがって、ここでデーモドコスが「勇士らの功しの歌」としてこのテーマを扱ったのは、十分納得のゆく選択であったといえよう。

（2）アキレウスとオデュッセウスの性格のこのような対比は、『イーリアス』の他の部分でも明言されている。たとえば９．３１２－１３では、アキレウスが「肝で思っていることと、口に出して言うことが違うような男は、冥府の門と同様嫌いなのだ」と語り、オデュッセウスが時には嘘を語ることも厭わない策士であることが強調されている。また、１９．２１７－１９では、オデュッセウスが「アキレウスはわたしより強い。槍も優れている。しかし思慮においては私のほうが優れている」と語って、ふたりの性格の対比を際立たせている。

（3）叙事詩の伝統の中で、アキレウスとオデュッセウスの対立をテーマとする叙事詩がかつて存在していた可能性があり[5]、『オデュセイア』詩人はそ

---

[4] Marg (1956) ２１は、スコリアの記者が、その場の要請に基づいてこの話を創作したもの、としている。

[5] Nagy (1979) 23 は、ここで語られている物語は、ある失われた叙事詩に基づくもので、その叙事詩は、アキレウスとオデュッセウスの間で、どちらがアカイア軍中最も優れた勇士か、という争点をめぐって繰り広げられた喧嘩で始まると想定している。もしその指摘が正しけ

の失われた叙事詩から、この話を取材したという想定が成り立ちうる。以上のように考えると、アキレウスとオデュッセウスの喧嘩の理由に関する古註（BE ad Od.8.77）の説明は説得力があり、これを受け入れてもよいように思われる。

デーモドコスが語るこの喧嘩の結末は不明である[6]。しかし、もしこれが以上で述べたように、アキレウスの武勇とオデュッセウスの策略をめぐる喧嘩であり、トロイア攻略をめぐるものであれば、そのことから我々が思い浮かべるのは木馬の計略であろう。つまり、最終的にトロイアは計略によって滅ぼされた。結果的にはオデュッセウスの主張したように、策略と智慧（μηχανὴ καὶ φρόνησις）によってギリシア方は勝利したのである。したがってオデュッセウスが第３の歌として木馬の話をデーモドコスに所望したとき、それは第１の歌で歌われた、武力と策略をめぐる両雄の緊張関係の延長ととらえることができる。このように、第１と第３の歌は、「策略」というモチーフによって、緊密に結びついていることがわかる。すなわち、策略による勝利をオデュッセウスが発案したのが第１の歌であり、第３の歌はその実際の結末という構造をなしているのである。Fenik の指摘するとおり、これらはきわめて良くバランスのとれた構造となっているのである[7]。

第３の歌で語られる木馬は、オデュッセウス自身によって罠（δόλος, ４９４）と表現されている。『オデュッセイア』ではこの他に２箇所、木馬についての記述があるが（４．２６６－８９；１１．５２３－３２）、これら２

れば、アキレウスとアガメムノーンの喧嘩で始まる『イーリアス』の構想も、その失われた叙事詩から学んだものであるのかもしれない。あるいは「英雄の喧嘩で始まる叙事詩」という叙事詩のスタイルが存在していた可能性もある。

[6] 神託の下された時と、喧嘩の起った時に関して、多少問題が残る。８１行の τότε を、神託が下された時（ὅτε, ８０）と解釈すれば解決されよう。すなわち、神託は戦争の初期に下され、喧嘩は戦争の終末近くに起ったと考えるのである。しかし Garvie (1994) 249–50 は、喧嘩の時（ποτε ７６）を、戦争の初期に属するもの、と考えている。

[7] Fenik (1974) 157.

つの箇所は、共に木馬内部の出来事を扱っている。前者は、メネラーオスがテーレマコスに対して、オデュッセウスの手柄を聞かせる条りで、ヘレネーが木馬内部にひそむ兵士たちの声音で語りかけた時、それに答えようとする兵士たちをオデュッセウスが引き止め、危機を救ったというものである。後者では、オデュッセウスが冥界でアキレウスに会って木馬の話を語る条りで、その折、オエュッセウスが木馬の扉の開閉の裁量を任されていた、と述べられている（１１．５２４－５）。

これに対してデーモドコスの歌は、上記２箇所で語られた木馬物語の、前と後に起った出来事、すなわち木馬の建設と、トロイアの落城とを伝えている[8]。３ケ所とも、オデュッセウスの優れた資質が称えられているが、強調点は異なっている。先に述べたとおり、メネラーオスの話では、オデュッセウスの冷静な判断がアカイア人を救ったとされ（４．２８８）、第１ネキュイアではオデュッセウスが木馬の扉の開閉の責任を負っていたこと、つまり、この計略の実行責任者であり、またその成否をにぎっていたということが語られる。他方、デーモドコスの歌では、木馬はドロスとして位置付けられ、オデュッセウスの策略や智慧の卓越性が強調されている。

オデュッセウスがデーモドコスに木馬の歌を所望する際、あきらかに彼は第１の歌との連関を意識している。

ἀλλ' ἄγε δὴ μετάβηθι καὶ ἵππου κόσμον ἄεισον
δουρατέου, τὸν Ἐπειὸς ἐποίησεν σὺν Ἀθήνῃ,
ὅν ποτ' ἐς ἀκρόπολιν δόλον ἤγαγε δῖος Ὀδυσσεύς (492-4)

しかし今度は趣を変え、木馬作りの条りをうたってくれぬか－－－エペイオスがアテネのお助けを得て作り成し、名に負うオデュッセウスが、後にイリオスを陥れた将兵をその腹中に潜ませ、敵を欺く罠として敵の城内に運び入れた、その木馬の物語をじゃ。

---

[8] オデュッセウスは「木馬作りの条り」（４９２）を歌うよう求めたのに対して、デーモドコスは歌の主題を多少ずらしている。この問題に関しては、後にふれる。

彼は自らの最大の功績としての「木馬作り」（ἵππου κόσμος，４９２）の歌を聞きたいと思った、なぜなら、これこそ、この８巻の冒頭で「都市を滅ぼすオデュッセウス」（πτολίπορθος 'Οδυσσεύς，８．３）という彼に付けられたエピテトンの、実体をなすものだからである[9]。木馬を作ったのはエペイオス（４９３）である[10]。しかし上に引用したとおり、そこに「兵を潜ませ、敵を欺く罠として敵の城内に運び入れた」のはオデュッセウスであった。エペイオスは木馬そのものの製作者であり、他方この計画全体の責任者は、紛れもなくオデュッセウスであったのである。「ἵππου κόσμος」という用語は、木馬本体の製作というよりもむしろ、この策略を企画し、遂行する木馬計画全体をさしていると考えられる[11]。したがってここでオデュッセウスが所望した歌は、木馬の「製作」の物語ではなく、木馬計画の全容をさしていると解釈すべきであろう。その意味で、オデュッセウスは、まさに「都市を滅ぼす人」であった。このように、オデュッセウスの策略が戦争を勝利に導き、トロイアを崩壊させたことを、オデュッセウスは歌ってほしかったのである。

このようなオデュッセウスの智慧と策略を語る、第１と第３の歌の間に、第２の歌、アレースとアプロディーテーの恋愛物語が歌われる[12]。策略の成

---

[9]「都市を滅ぼすオデュッセウス」については、岡（１９８８）５－６参照。

[10]エペイオスが木馬の「建造者」であったということは、『小イリアース』の梗概にもみえ、また後代の作品でも一貫している。たとえばエウリーピデース『トローアデス』１０－１１；ウェルギリウス『アエネーイス』２．２６４。

[11] κόσμος（４９２）という語が意味している内容を正確に理解することは難しい。 Garvie (1994) *ad* 492, は "the fashioning of the horse"; Stanford (1959) *ad* 492 は "the arrangement of the horse"; Hainsworth (1988) *ad* 492 は "i.e.. κατασκεύης; Dimock (in the revised translation of Loeb)は "the building of the horse"と解釈している。

[12]ヘーパイストスとアプロデイーテーが夫婦であるとする話は、他の作品には見られない。たとえば『神統記』では、アプロディーテーの夫はアレースであり（９３２－４）、ヘーパイストスの妻はカリスである（９４５）。『イーリアス』でも、ヘーパイストスの妻はカリスである（１８．３８２）。このため Brown (1989) 283 n.2 は、ヘーパイストスとアプロディーテーが夫婦であるとの設定は、詩人による「この場に即した創作」（"an *ad hoc* invention

功という点では第１、第３の歌と同じテーマであるが、この第２の歌は趣向をがらりと変え、全く別の視点から、巧みな策略の成功を歌っているのである。第２の歌全体に、τέχνη と δόλοςということばが繰り返し用いられ、ヘーパイストスの策が見事な謀みであったことが強調されている。すなわち、ヘーパイストスの作った鎖は δόλοςであり（２７６、２８２）、それらは非常に巧妙に作られ（δολόεντα τέτυκτο、２８１）、巧みに作られた鎖（δεσμοὶ τεχνήεντε、２９６－７）であり、また、策略と鎖（δόλος καὶ δεσμός、３１７）でもある。神々はヘーパイストスの τέχναι を見ており（３２７）、アレスは τέχνη によって捕らえられた（３３２）と言われている。このようにこの物語では、技術と策略が不可欠の要素となっている。策略がなくとも技術は成り立つであろう。しかし策略には、技術や智慧を必要とする。なぜなら、策略は智慧の発露に他ならないからである[13]。この箇所で巧妙な技術や智慧が強調される時、それはとりもなおさず、策略の巧みを物語るものであることは注目に値しよう。

同じ δόλοςを取扱いながら、第１と第３の歌が戦場を舞台にしているのに対し、ヘーパイストスの策略は家の中の問題である。その結果第２の歌は、主として『オデュッセイア』後半で語られる、イタカ島のオデュッセウスの館の中での出来事と、次のような諸点で密接に結びついている。

最も重要な点は、ヘーパイストスが鎖を取り付けるのは寝台の支柱（ἑρμίς、８．２７８）であり、この場所は、オデュッセウスのあの特殊な寝台の秘密と同一の場所であり、同一の言葉が用いられている（２３．１９８）ことである。

"）かもしれないと指摘している。そうであれば、技術と企みの神ヘーパイストスを恋愛の復讐者に起用した詩人の配役の意図は、「策略を用いた弱者の勝利」という叙事詩全体のテーマに、見事に符合しているといえるであろう。

[13] Detienne and Vernant (1978) 3, "*metis* is a type of intelligence and of thought, a way of knowing; it implies...intellectual behaviour which combines wisdom, forethought, subtlety of mind, deception, resourcefulness...."

ἀμφὶ δ' ἄρ' ἑρμῖσιν χέε δέσματα κύκλῳ ἁπάντῃ　　（８．２７８）
ἑρμῖν' ἀσκήσας, τέτρηνα δὲ πάντα τετρέτρῳ　　（２３．９８）

オデュッセウスの寝台の秘密（支柱の１本が、オリーブの生きた木であったこと）は、夫と妻（と１人の侍女）しか知らないもの、つまりオデュッセウスにとっては自分の正体をペネローペイアに対して最終的に証明するものであり、ペーネロペイアにとっては、その秘密を夫以外の誰も知る人がいない、という点で、彼女の貞淑を証明するものであった。このように８巻においてヘーパイストスの巧みな技がしかけられた場、すなわち妻の浮気をおさえる決定的な箇所と、２３巻においてオデュッセスの正体とペーネロペイアの貞淑を証明するものが同一の場所、「寝台の支柱」（ἑρμίς）であることは、きわめて象徴的である。このことは、第２の歌と『オデュッセイア』全体のテーマとを繋ぐ、重要なポイントであり、この第２の歌が『オデュッセイア』全体の筋といかに深く関わっているかを示すものであろう。

第２の点として、ヘーパイストスの鍛冶工としての技は、奇妙なことに、蜘蛛の巣（ἀράχνια λεπτά、２８０）に譬えられている。蜘蛛の巣は、少女アラクネーの物語が示すとおり、機織の技術と結び付けられ、機織は通常女性の活動領域である。したがって男性神であるヘーパイストスの技術が、敢えて蜘蛛の巣に譬えられた時、それはとりもなおさず女性の機織を連想させ、更にそれは、織ってはほどくペーネロペイアの機織りの策略を思い起こさせる[14]。ペーネロペイアのこの策は、『オデュッセイア』で３回言及される重要なモチーフである（２．１０７；１９．１４６；２４．１４２）。彼女は

---

[14] Detienne and Vernant (1978) 300 は、「織る」という行為は、糸が曲線を描いて連なってゆく様から、工芸の魔術的な力や「欺き」と関連をもつと指摘している。織物の「deceptive nature」については、Goldhill (1988) 5 参照。『イーリアス』１８．３９９－４０２によれば、ヘーパイストスはその鍛冶工としての技術を９年にわたってエウリュノメーに習ったという。彼の技術が女神によって教えられたものであること、しかもそのことをアキレウスの武具を作る直前に言及しているということは、彼の技が男性的な鍛冶と、女性的で微細な工芸の両方を合わせ持つものであるということを示しているのかも知れない。

この機織の策略を、求婚者たちの求婚を避けるための手段、いわば夫以外の男性との密通を避けるための手段として用いた。ヘーパイストスの織り成す鎖は、妻の密通を捕らえる手段である。織り成す、というモチーフを軸に、ヘーパイストスの技術は、ペネローペイアの機織りを思い起こさせ、かつ目的という点でも、ひとつは現に行われている密通を捕らえる手立て、ひとつは密通を未然に避ける手立て、という表裏の関係をもっているのである。

第３点として、ヘーパイストスは家庭内（夫婦）の問題の解決のために技術を用いた。他の神々は「戸口で」（ἐν προθύροισι、３２５）見ていた、とわざわざ言及されているところから、この問題が家庭内の問題であることが強調されているといえよう[15]。それはまさにオデュッセウスがイタカ島に戻って解決せねばならない問題であった。すなわち、ヘーパイストスは妻とその愛人の問題に、オデュッセウスは妻と求婚者たちとの問題に直面している。夫と妻と、妻の愛人ないし求婚者、の三者の問題という点で、両者は深く結びついているといえよう。従って、ヘーパイストスのアレースに対する復讐は、『オデュッセイア』の後半すべてを費して語られる、オデュッセウスの求婚者に対する復讐を、色濃く思い起こさせるのである。

アフロディーテーとアレースの密会は、ある種のパラデイグマの役割を果たしているとも考えられる。その点で、従来指摘されている、クリュタイメストラとアイギストスの物語が果たしているものと同様の役割を担っているといえよう。『オデュッセイア』冒頭で、ゼウスによってオレステースの仇討ち話が提示され（１．２８－４３）、その後アトレウス家の物語は常にオデュッセウスの家の問題と対比をなして語られている[16]。つまり、アガメムノーンの帰国後の出来事を繰り返し言及することにより、正しい帰国のあり

---

[15] Brown (1989) 286 によると、「ἐν προθύροισι」という言葉は、公共の場と家の中とを分かつ、接点であるという。神々は家の中に入らず、外から中を見ていたのである。したがって、「戸口」でこの情景を見ていた神々の「笑い」は、いわば公共の性格をもつものであるとBrown は指摘している。神々の笑いについては後述する。

[16] アガメムノーンの物語のパラデイグマとしての役割については、Olson (1995) 26, March (1987) 84; Garvie (1994) 294 参照.

方が示されているのである。同様にヘーパイストスの策略も、アトレウス家のパラデイグマと同様、復讐のひな形として提示されているのではないだろうか。すなわち不義をはたらこうとする者に対する正しい復讐のあり方を指し示し、将来オデュッセウスが家に帰り着いた時になすべき行為を提示しているとみられる。その意味で、このヘーパイストスの物語は、『オデュッセイア』の後半の復讐物語を先取りしたものであるといえよう。

以上のように、デーモドコスの語る３つの歌はどれも、「策略」を共通のテーマとしており、それぞれの仕方で「策略による勝利」を歌い上げているのである。

2

『オデュッセイア』全体の主題と、第８巻で語られる物語との関連を論ずる第２点として、強者に対する弱者の勝利というモチーフについて考察したい。これは特にデーモドコスの第２の歌の中で、明確に主張されている。すなわち、「復讐者は弱者である」というテーマである。

ヘーパイストスが肉体的に劣るものであることは数回にわたって言及され、強調されている。たとえば、「アプロディーテーが足萎えの私を（ἐμὲ χωλὸν ἐόντα、３０８）軽んじ、乱暴者の（αἴδηλος, 309）[17]アレースにうつつを抜かしている」、「アレースは美貌で足も達者だが、私は不具に生まれついている」（３１０－１）とされ、強者のアレースと、弱者のヘーパイストスという対比は明確である。この両者の対比は、見物にやってきた神々によって、一層明らかに示されている。

---

[17] αἴδηλοςの語源と意味は明確ではない。Hainsworth, Garvie, *ad loc.*は語源を ἀ-ϝιδ-ηλος と想定し、その意味を"destructive" あるいは "unbearable to the sight" と考えている。Stanford, *ad loc.* は、'Αΐδης という語源から"hellish" の意味であると解釈している。

κιχάνει τοι βραδὺς ὠκύν,
ὡς καὶ νῦν Ἥφαιστος ἐὼν βραδὺς εἷλεν Ἄρηα,
ὠκύτατόν περ ἐόντα θεῶν οἳ Ὄλυμπιον ἔχουσι
χωλὸς ἐὼν τέχνῃσι· (329-332)

「野呂間が韋駄天をつかまえた。現にいまも、足の遅いヘパイストスが、オリュンポスに住む神々の中でも、駿足並ぶ者もないアレスをつかまえたのだ。足が悪いのに、さすがは名匠の芸じゃ。アレスめもこうなっては、密通の償いをせねばならぬぞ。」

「智慧（技術）において優れたヘーパイストスが、肉体的に優ったアレースに勝利する」という話は、弱者が智慧によって強者を打ち負かす典型的な成功物語のパターンをふんでいる。コミカルな要素を漂わせ、一見娯楽的な余興としての体裁をとりながら、実はこの物語はまさしく、弱者の立場におかれたオデュッセウスの最終的な勝利を暗示しているといえよう。

オデュッセウスはアカイアの勇者であり、弱者とは言えないとの議論もあろう。しかしながら、この第２の歌の直前に語られている運動競技の場面は、オデュッセウスの立場を明確に示している。すなわちこのエピソードのなかで、彼はエウリュアロスと対比されているが、そのエウリュアロスはアレースとの類似点が強調されている。これにより、オデュッセウスが畢竟、ヘーパイストスのような弱者の立場にたっていることが暗示されていると考えられる[18]。この事は次のような点から理解されるであろう。

エウリュアロスとアレースには、共通な要素がいくつかある。エウリュアロスは、風采は一際すぐれているが、愚か者である（１７６－１７７）。姿は神にも似ているが、言葉には品格がない（１７５）。アレースも同様に、見かけは良いが乱暴者である（３０９－１０）。アレースが駿足であるよう

[18] アレースとエウリュアロス、ヘーパイストスとオデュッセウスの関係については、Braswell (1982) 131-5 参照。

に（３０９）、エウリュアロスも格闘技ですべての貴公子を凌いでいる（１２６－７９）。この両者の類似性は、実はこの運動競技が始まる前から暗示されていたのである。つまりエウリュアロスが初めて紹介される際に、「殺りくの神アレースにも似たエウリュアロス」（Εὐρύαλος, βροτολοιγῷ ἶσος Ἄρηι, １１５]と、明言されているのである。

エウリュアロスとの言い諍いにおいて、オデュッセウスは人間を２種類にわけて叙述するが、これは明らかにエウリュアロスと自分のことをさしているとみられる。それによると、

> こうしてみると、神々は人間のだれにも、体つき、心ばえ、弁舌などのすぐれた資質を、一様には授けられぬことが判る。ある男は、風采は揚がらぬものの、その弁舌には天賦の美質が宿り、人々は楽しげにその男を眺める。慎ましく人をそらさぬ口調で淀みなく弁じて、会衆の中でも一際異彩を放ち、町を歩けば皆が神を仰ぐような目で見てくれる。ところがまたある男は、その風采は不死なる神にも似ているが、そのいう言葉には品格が具わっておらぬ、あたかもそなたが、神もほかに造りようもないほどの、際立った美貌に恵まれているが、頭の中は空であるのと同じだ。（１６７－７７）

つまりオデュッセウスは自分のみかけはエウリュアロスに劣るかも知れないが、技と策謀においては自分の方が優っていると主張しているのである[19]。この外観と内実の対比は、アレースとヘーパイストスの対比を思い起こさせ、二組の関係はきわめて良く重なる。すなわち、エウリュアロスがアレースに似ていると強調されることによって、対比関係に基づき、オデュッセウスがヘーパイストスと類似関係にあることが、強く暗示されているのである。

---

[19] オデュッセウスの容貌については、『イーリアス』３．２０３－２４にも言及されている。ここでは、オデュッセウスの見かけ（外観）と智慧（内実）が対比的に述べられ、背の高さと肩幅において、彼はメネラーオスに劣るが、弁舌の才は類い稀であるとされている。Newton (1987) 13 n.8 は、この『イーリアス』の箇所の註として"Odysseus' legs are unusually short and thin"と述べているが、これは誇張された意見であろう。

アレースとヘーパイストスの対比は、上に述べたような外観と内実の対比だけでなく、能力的な優劣の対比（足の速い者と遅いもの、強い者と弱い者）という側面ももっている。前者の対比がエウリュアロスとオデュッセウスにあてはまることは、上に引用したオデュッセウス自身の言葉から、明らかであろう。後者の対比、すなわち能力的な対比がオデュッセウスにもあてはまるだろうか。オデュッセウスはヘーパイストスのように不具ではなく、むしろ強い英雄である。しかし『オデュッセイア』の中には、オデュッセウスが弱者の立場に立つ場面が実に数多く見られる。

９巻で語られるポリュペーモスとの関係は、明らかに智慧ある弱者が強者を打ち取る構図である。そして求婚者殺りくの場面でもまた、この図式があてはまると考えられる。つまり、多くの求婚者たちを相手に、オデュッセウスはテーレマコスとふたりで立ち向かわねばならず、多勢に無勢という対立を強いられるのである。求婚者のひとりひとりは、決してオデュッセウスより強い勇者ではなかろう。しかし多くの求婚者が一団となってオデュッセウスに対立すれば、オデュッセウスは明らかに弱者の立場に立たざるをえない。

多勢に無勢で立ち向かうエピソード、つまりオデュッセウスが孤立して弱者の立場に立たされる状況は、実はオデュッセウスと部下たちの対立にも見られる。たとえばキコネス人の町（９．３９－６１）、アイオロスの島（１０．３４－５５）、トリナキエーの島（１２．２６０－４０２）での各冒険がそれである[20]。

キコネス人の町では、オデュッセウスとその部下たちはトロイアにおける戦いのように、町を破壊し、男たちを殺し、女たちと財宝を略奪する（９．４０－２）[21]。この勝利の後、オデュッセウスの部下たちは、早く引き上げ

---

[20] オデュッセウスに対する部下の反抗については、Heubeck and Hoekstra (1989) 10-11.

[21] この戦いの様子は、後にオデュッセウスがエウマイオスに語る嘘話（アイギュプトス人との戦い、１４．２５９－６８）によく似ている。これら二つの戦争の話には、共に、内容と言語の両面において、『イーリアス』との共通点がみられる。この議論については Heubeck and Hoekstra (1989) 15 を参照。

よというオデュッセウスの注意を聞き入れなかった。そのことが彼らの敗走につながるのである（５９－６１）。オデュッセウスは自分の考えが正しいと確信していたにもかかわらず、部下たちの数が大勢であったために、彼らを自分に服従させることができなかった。『イーリアス』で描かれる英雄たちのように、圧倒的な権威をもって部下たちに命令を下すことができなかったのである。

アイオロスの島では、部下たちはオデュッセウスが財宝をもっていると誤解し、それを妬んで風の袋を開けてしまう。この時オデュッセウスは、船から身を投げてしまおうかと思う程に失望し、ひとり頭をかかえて寝こんでしまう（１０．３４―５５）。トリナキエーの島でも、エウリュロコスとその仲間たちがオデュセウスに反旗をひるがえしたが（１２．２７９－９３）、オデュッセウスはひとりであったために（μοῦνον ἐόντα, 297)、大勢に抵抗することができず、自らの提案を一部譲歩せざるをえなかった。

エウリュロコスはこれ以前にも、オデュッセウスに反抗している（１０．２６６－９、４２９－４３７）。しかしこの時には他の仲間たちがエウリュロコスを支持しなかったため (Εὐρύλοχος δέ μοι οἶος ἐρύκανε πάντας ἑταίρους, 10.429)、反抗は効を奏さなかったのである。したがって求婚者の場合と同様、部下のひとりひとりは劣った者たちでも、もし彼らが一団となって反抗すれば、オデュッセウスは対抗できず、弱者の立場にたつことになる。このように、部下たちと関係にあってさえ、彼が弱者となる事態がしばしば起ったのである。つまり『オデュッセイア』におけるオデュッセウスは、ほとんど常に「弱者の立場におかれた英雄」として描かれていることがわかる。

このように、『オデュッセイア』の全ストーリーは、逆境にある人間が、いかに成功を収めるかというテーマに貫かれているとすれば、それはヘーパイストスが彼の困難を乗り越えて成功する話と明確に対応しているのである。すなわちヘーパイストスとアレースの物語は、オデュッセウスの苦難と勝利の物語の縮図であるともいえよう。このように、デーモドコスの語る第２の歌は、『オデュッセイア』全体の中心的主題を指し示しているのである。オデュッセウスの長い苦難の物語が、このデーモドコスの第２の歌によって、神々の間の一瞬のエピソードに凝縮されている、ともいえよう。その意味で、

このデーモドコスの第２の歌は『オデュッセイア』全体の「入れ子」のような関係にあると考えられる。

神々の「消し止めようもない笑い」（(ἄσβεστος γέλως、８、３２６）は、この第２の歌全体をコミカルなエピソードにする効果をもち[22]、また、神々の見せ物、娯楽、というような性格を帯びさせてもいる[23]。また、この笑いは、ヘーパイストスの技術を賛嘆するものでもあり、さらに、「足萎えの神が駿足の神を捕まえた」という事実への賞賛でもあろう。足の早いものが勝利するのは当たり前であるが、遅いものが勝てば驚きもするし、面白くもある。逆境にある者が勝ったという驚きの結果を、神々は面白がったのである。

このデーモドコスの歌を聞いた後、第１、第３の歌の場合とは異なり、オデュッセウスは心に喜んだ（３６８）。オデュッセウスの喜びは、ヘーパイストスと自分とを重ね合わせたことによると考えられる。つまり、ヘーパイストスが彼のこれまでの冒険と同様、智慧により逆境をはね除けたことを喜んだのであろう。また更に、そのような勝利を神々が喜び、承認したことから、オデュッセウス自身も同様に求婚者との戦いに勝利した時に、その勝利もまた、神々により喜ばれるものと感じたからでもあろう。あるいはまた、彼がこの後立ち向かわねばならない求婚者との戦いにおいて、第２の歌が復讐の勝利を指し示す良き前兆である、と理解したともみなされよう。すなわち、求婚者に対する復讐こそ、帰国を前にしたオデュッセウスの心を最も大きく占める問題であるから、この第２の歌を聞く事により、求婚者に対する戦いに勝利するという兆しを与えられた思いがして、オデュッセウスは心から喜んだのかもしれない。このように、弱者が強者を凌ぐという『オデュッセイア』における重要なテーマは、８巻の運動競技の場面とデーモドコスの第２の歌に、とりわけ色濃く反映されているのである。

---

[22] Olson (1989) 142.

[23] Levine (1982) 97.「神々の笑い」に関しては、この他、ヘーパイストスに対する嘲笑と解釈る説（Brown (1989) 287）もある。

3

オデュッセウスの正体は何者か、という問も、この叙事詩全体を貫くきわめて重要なテーマである。デーモドコスの３つの歌は、このテーマにも深く関わっている。

パイエーケス人の島に流れ着いた時、オデュッセウスは身につける衣もなく、嵐に翻弄されて疲れ果てた放浪者であった。ナウシカアによって衣服と食べ物を与えられ、人間性を取り戻してゆくと同時に、彼の正体も、徐々に明らかにされてゆくのである[24]。王妃アレテーが彼の名前を始めに聞いた時、彼はその問には答えず、そのかわりに、このスケリエー島に到着するまでに彼が経験してきた冒険を物語る（７．２３７－９７）。オデュッセウスが正体をなかなか明らかにしないことによる、ドラマティックな効果については、すでに多くの研究者が指摘するところである[25]。確かに、この名前を名乗らない「見知らぬ旅人」の存在がかもし出す不可思議な緊張感は、８巻全体を覆っているといえよう。そこに集っていた人々の誰もが宴の間中、「あの人は一体誰だろう」といぶかしく思い続けたはずである。

デーモドコスの第１の歌の後にオデュッセウスがどのような反応を示したか、実に注意深い描写がなされている。彼はひそかに涙を流したのであった。

> 高名の楽人は、このような物語をうたったが、オデュッセウスは紫色の大きい外衣を逞しい手でつかむと、頭からすっぽりと被り、端麗な顔を隠した。パイエケス人の手前、眉の下から涙をこぼすのを恥じたからで、至妙の楽人がうたいやめるごとに、涙を拭って外衣を頭から外し、把手二つの盃を手に取っては、神々へ酒を献じていた。しかし楽人のうたう物語に興の乗ったパイエケス人の領主たちが促すままに、楽人が再びうたい始めるとそのたびごとに、オデュッセウスもまた再び頭を覆って、悲しげに呻くのであった。（８．８３－９２）

---

[24] Schadewaldt (1959) 19.

[25] この議論については Fenik (1974) 7-20 を参照。

オデュッセウスの涙は、歌に興じ大いに喜んでいるパイアーケス人と、際立った対比をもって描かれている。彼の悲しみは iterative を用いることによって、いやが上にも強調されているのである（ἔλεσκε, 88; σπείσασκε, 89; γοάασκεν, 92)。戦後１０年を経て、トロイア戦争はすでに、それに関与したすべての人々にとって苦しみをもって思い出されるものとなっていた。勝利者の側であるにもかかわらず、オデュッセウス自身、トロイア戦争を「アカイア人たちの運命」(’Αχαιῶν οἶτος, ８．４８９)、「彼らが苦しんだあらゆることごと」(ὅσσ' ἐμόγησεν, ８．４９０)と、歎きつつ思い出しているのである。

アルキノオスはオデュッセウスのこの涙を見て、きっとこう思ったことであろう、「この放浪者はもしかすると、トロイア戦争に関わった英雄のひとりではなかろうか、そうでなければ、どうしてトロイア戦争にまつわる話を聞いて、このように泣くことがあろうか。もしそうであれば、この人はアカイア方の勇者であろうか、あるいはまたトロイア方の落ち武者であろうか」と。アエネアースのように、戦いに破れて放浪するトロイア方の者もいたであろう。オデュッセウスの涙は、敗者の涙、とアルキノオスに写ったかも知れない。すなわち第１の歌が終わった段階で、名も知らぬ放浪者の正体は、彼が涙を流したことによって、おそらくトロイア戦争を戦った英雄であろう、との暗示が与えられたのである。こうして、オデュッセウスの正体をめぐる謎は、デーモドコスの歌が進むにつれて次第に先鋭化し、焦点がせばめられてゆく仕組みになっている。

次の運動競技の場面でオデュッセウスが円盤競技に勝利したことは、オデュッセウスの正体という問題に関して、２つの意味をもっている。

（１）彼は旅の商人ではなく、貴族の生まれであること（１５９－６４）

（２）勝利に気をよくしたオデュッセウスが、思わず自分がアカイアの者であると口をすべらせてしまうこと（２２０）、の２点である。エウリュアロスは、オデュッセウスが「様々な競技に通暁している人」（１５９－６０）ではなく、「商いをする船乗りの頭として積み荷を気遣い、帰り荷や暴利を貪ることばかり心掛けている人」（１６２－４）であると思っていた。

「様々な競技に通暁している人」とは、自らの日々の働きで生計をたてる必要がなく、運動競技などを行って自分の能力を高めるゆとりのある、貴族の出身であることを意味している。つまりエウリュアロスはオデュッセウスを身分の卑しい商人と見下して、よもや競技に勝つ事はできないと見ていたのである。しかしこの予測を覆してオデュッセウスは円盤の競技に勝つことができた。その時彼は、弓の名手でもあることを自慢して、このように語る。

> わたしは世に行われているいかなる競技にも拙くはない。磨き上げた弓を扱う術も十分心得ている。敵の大軍を前にして矢を放てば、たとえ周り多勢の味方がいて、敵兵目指して弓を射たとしても、わたしが第一番に敵を倒す自身がある。トロイエの国に在って、われらアカイア勢が弓を引く時、わたしに勝ったのはひとりピロクテテスのみであった。彼を除けば、今この世に生きて飯を食らっている人間の誰よりも、弓の腕前ではわたしが遥かに優れていると断言してもよい。（２１４－２２）

「私達アカイア人が弓を引く時」（ὅτε τοξαζοίμεθ ’Αχαιοί, 220）は、オデュッセウスにとって、事のはずみに語ってしまった言葉である。緊張みなぎる競技に勝利した後の喜びと安堵感、軽蔑をはねのけて自らの高貴な出自を証明できた自負心は、オデュッセウスのような智慧あふれ、注意深い人の心をも惑わすのであろう。このようにしてオデュッセウスは、自分がアカイア方の勇士であることを問わず語りに語ってしまったのである。

しかし興味深いのは、このようにオデュッセウスが彼の正体に関する重大な情報を自ら語ってしまった後も、その事に対する人々の反応やオデュッセウスの後悔などが、一切言及されないことである。「私達アカイア人が」と彼が語った途端、宴に集う人々の間に一瞬大きな驚きが走ったであろう、と私達は想像する。しかしオデュッセウスの言葉は何ごともなかったように進んでいる。説明、理由付け、コメントは避け、聴く者たちの想像をかきたてゆく。これが『オデュッセイア』詩人の手法なのであろう。この箇所のみならず、たとえばデーモドコスの歌を聴いたオデュッセウスがなぜ涙を流したり、喜んだりしたのかという説明もないし、デーモドコスが第１と第２の

歌として何故あのテーマを選んだか、という説明もない。物語の理解と解釈とを聴き手にゆだね、聴き手の想像の拡がりを試している、ということであろうか。しかしともかくこの段階で、見知らぬ放浪者はトロイア戦争に関与した英雄で、しかもアカイア方の戦士であるということが明らかとされたのである。

デーモドコスが二つ目に選んだ歌は、密通と報復をめぐるものであった。これはあたかもオデュッセウスの気持ちを尋ねるかのようである、「あなたは家に帰った時、策略をはかり、復讐を謀むおつもりか」と。見知らぬ旅人が、トロイア戦争を戦ったアカイア方の勇者であると知った今、デーモドコスは『イーリアス』風の色づけをして神々を語る。コミカルに描かれる神々は、『イーリアス』ではおなじみのものである。たとえば不自由な足をひき、息をきらせて酒を注ぐヘーパイストスを笑う神々（1．５５９－６００）、ゼウスを魅惑するヘーラー（１４．２９２－３５１）、テオマキア（２１．３８３－５１３）など、『イーリアス』に登場する神々は、周知のとおり、常に喜劇的である。これに対して『オデュッセイア』では、喧嘩や浮気などの神々の不品行が描かれることはなく、この第２の歌だけが唯一の例外である[26]。また、アレースとアプロディーテーはすでに『イーリアス』において、面白おかしく語られてもいる（5．３３０－４１７；８４６－９０６）。つまり、第２の歌と性格を同じくするような神々の物語は、『イーリアス』に特徴的に見られるのである[27]。デーモドコスは誰に所望されたわけでもなく、自らの選択でこの第２の歌を歌い出した（２６６）。彼はこの時、この旅人に対する並々ならぬ関心のもとにアレースとアプロディーテーの歌を選び、歌った。つまり、きわめてイリアス的な世界を繰り広げてみせて、オデュッセウスの反応を窺ったと解釈されよう。結果的にデーモドコスの選択は、オデュッセウスの正体をめぐる問いの核心をつくものであったのである。

この歌に対しては、オデュッセウスもパイアーケス人も、ひとしく楽しみ、満足した。オデュッセウスは先に述べたように、ヘーパイストスの復讐の成

---

[26] Burkert (1960) 134-9.

[27] Garvie (1994) 293.

功を、自らの求婚者復讐の成功の前触れとしてとらえ、喜んだのである。旅人の正体は、また少し明かとなった。つまり、彼は妻に言い寄る者を排除せねばならない状況にあり、劣勢な夫が、策略によって復讐をすることに並々ならぬ関心をもつ人物である、ということが明らかにされたのである。

デーモドコスは第３の歌を歌う時、奇妙にも、テーマを、オデュッセウスのリクエストからいく分ずらしている[28]。オデュッセウスはアカイア人の視点からの木馬物語を所望しているのに（４９２－５）、デーモドコスは戦争の苦しみ、とりわけトロイア人の悲惨な有り様を強調している。彼の歌によれば、トロイアが破滅の道をたどったのは、オデュッセウスの巧みな指導力というよりはむしろ、木馬を導き入れたトロイア人の決断のせいであったと主張している（αὐτοὶ γάρ μιν [sc. ἵππον] Τρῶες ἐς ἀκρόπολιν ἐρύσαντο, ５０４）。これはおそらくオデュッセウスの聴きたかった話ではなかったであろう。オデュッセウスは首尾よく運んだ木馬計画における、彼の成果を称える歌を聞きたかったに違いない。デーモドコスが語るトロイアの人々の戦いの状況、特にデーイポボスの家での凄惨な戦いは、ここでデーモドコスが語らねば、オデュッセウスが知ることのなかった戦いであろう。デーモドコスは、あたかも、あなたの木馬の計略の後、このような悲惨なことが起りました、と告げているかのようである。

この第３の歌の後、８巻の最終段で、アレテーに変わって今度はアルキノオスが旅人の名前を問う。

τῷ νῦν μηδὲ σὺ κεῦθε νοήμασι κερδαλέοισιν
ὅττι κέ σ' εἴρωμαι· φάσθαι δέ σε κάλλιόν ἐστιν.
εἴπ' ὄνομ' ὅττι σε κεῖθι κάλεον μήτηρ τε πατήρ τε
ἄλλοι θ' οἳ κατὰ ἄστυ καὶ οἳ περιναιετάουσιν. (548-51)

---

[28] デーモドコスによるテーマの変更に関しては、Harrison (1971) 378-9; Olson (1995) 47, n.8 ; 佐野 (1999) 5 参照。

されば今はそなたも客人よ、これからわしの訊ねることに、なにか下心をもって隠すことなく、ありのまま答えていただきたい、そなたにしても、はっきり話される方がよろしかろう。そなたの国許では、御両親ならびに町の人々、また近隣の住民たちが、そなたをどういう名前で読んでいたか、話していただきたい。

今はもう（τῷ νῦν、５４８）隠さずに、と言う行頭の言葉は、いかに長い間彼の名前が秘密のままにおかれ、いかにその緊張が高まっているかを明確に物語っている[29]。この後、９巻冒頭で、ついにオデュッセウスは名を名のる。

Εἶμι 'Οδυσσεὺς Λαερτιάδες, ὃς πᾶσι δόλοισιν
ἀνθρώποισι μέλω, καί μευ κλέος οὐρανὸν ἵκει.　（９．１９－２０）

わたしはラエルテスが一子、その端倪すべからざる空く棒のゆえにあまねく世に知られ、その名は天にも達するオデュッセウスです。

こうしてオデュッセウスは自ら名前を明かした。「今はもう」（τῷ νῦν）名のらざるを得ない状態まで追い詰められてしまったからである。８巻で語られる物語は、すべてこの瞬間に向かって収斂してゆくと言ってもよいであろう。旅人の正体という一点へと向かって集中し、緊張が高められてゆくのである。第１の歌から徐々ににオデュッセウスの正体の秘密は明るみに出されてゆき、彼は追い詰められたのだ。まずトロイア戦争に参加した勇士であること、アカイア人であると告げてしまったこと、故郷に帰って不義の問題に決着をつけねばならないこと、そして木馬の策略に関係したこと。ここまで追求されて、彼はもう逃れる事はできなかったのである。このように、デーモドコスの３つの歌は、実に巧みに旅人の正体を問うてゆき、追い詰めていったといってよいであろう。あるいは、見方を変えれば、あれほど自らの名

---

[29] Besslich (1966) 67-8 の指摘によれば、νῦν という言葉によって、オデュッセウスが巧みに自分の正体を隠していた（とアルキノオスが思っていた）ことを明確に物語っている。

前に関して用心深いオデュッセウス、女神アテーネーに対してまで偽りの身の上話を語るオデュッセウス（１３・２５０―８６）に名前を名のらせるには、この８巻全体を費やして、その瞬間へゆきつくまでの準備をする必要があったともいえるであろう。７巻最終段でアレテーに名前を訊ねられて答えず（７・２３７－９）、８巻最終段で今度はアルキノオスによって再び名前を訊ねられたオデュッセウスが９巻冒頭で名前を名乗るまで、８巻はこうしてオデュッセウスが自ら正体を明かさざるを得ない状況に追い詰められてゆく過程を、一見それとはわからぬような、楽しく娯楽的な装いのもとに、実に見事に描ききっているのである。

結び

以上に論じたように、第８巻で語られる物語の特徴には、策略の強調、弱者が強者を凌ぐモチーフの使用、オデュッセウスの正体をめぐる謎の追求などが顕著な特徴として挙げられる。これらの点は、『オデュッセイア』全体の主要なテーマと見事に重なっている。その意味において、第８巻は『オデュッセイア』全体の基本的な主題と密接に結びついているといえよう。

特に第２の歌、アプロディーテーとアレースの恋愛物語は、オデュッセウスの復讐物語のひな型としての役割を果たしているとみられる。人間界の出来事を神々の世界に置き換え、しかもオデュッセウスにとっては多くの苦労と時間をかけて成し遂げた復讐を、非常に凝縮された一瞬の出来事として提示しているのである。したがって第２の歌は、『オデュッセイア』後半の物語の、意匠を替えた縮小版とみることもできる。その意味で、巧みな「入れ子構造」をなしていると考えられる。

デーモドコスの３つの歌は、しばしば語られるとおり、戦争－恋愛－戦争、あるいは動－静－動、といったリズムをもち、きわめてバランスのとれた構成をもっている。個々の物語も魅力あふれるものであるが、また同時に、３つの歌と１つの運動競技のエピソードをこのように配列した構成の巧みさは、並々ならぬものである。４つの話の連なりが、９巻冒頭の、オデュッセウス

の名前の告白に突き進んでゆく様は、見事な緊張感をつくり出しているのである。オデュッセウスはデーモドコスの歌を賞賛して、「まことに見事に歌われた」と語る (λίην κατὰ κόσμον ... ἀείδεις, 489)。しかしこの賞賛の言葉は、そのまま『オデュッセイア』詩人に向けられるべきものであろう。詩人が語る『オデュッセイア』の中で、別の詩人デーモドコスがその場面の聴衆によって賞賛される。それは『オデュッセイア』詩人への賞賛に他ならないという点で、これもまた巧みな「入れ子構造」になっているのである。

Bibliography

Besslich, S., *Schweigen-Verschweigen-Übergehen, Die Darstellung des Unausgesprochenen in der Odyssee*, Heidelberg: Carl Winter, 1966.

Braswell, B.K., "The Songs of Ares and Aphrodite: Theme and Relevance to Odyssey 8", *Hermes* 110 (1982), 129-137.

Brown, Christopher G., "Ares, Aphrodite, and the Laughter of the Gods", *Phoenix* 43 (1989), 283-293.

Burkert, W., "Das Lied von Ares und Aphrodite", *RhM* 103 (1960), 130-144.

Detienne, Marcel and Vernant, Jean-Pierre, *Cunning Intelligence in Greek Culture and Society*, tr. J. Lloyd, Sussex: The Harvester Press, 1978 (1974).

Fenik, Bernard, *Studies in the Odyssey*, *Hermes* Einzelschriften 30 (1974).

Garvie, A.F., *Homer, Odyssey, Book VI-VIII*, Cambridge University Press, 1994.

Goldhill, Simon, "Reading Differences: The *Odyssey* and Juxtaposition", *Ramus* 17 (1988), 1-31.

Griffith, Marg, "Contest and Contradiction in Early Greek Poetry", *Cabinet of the Muses, Comparative Literature in Honor of Thomas G. Rosenmeyer*, Atlanta: Scholars Press, 1990, 185-207.

Hainsworth, J.B., (Heubeck, A and West, S.), *A Commentary on Homer's Odyssey*, vol. 1, Oxford: Clarendon Press, 1988.

Harrison, E.L., "Odysseus and Demodokos: Homer, *Odyssey* θ 492f.", *Hermes* 99(1971), 378-9.

Heubeck, A. (Hoekstra A.), *A Commentary on Homer's Odyssey* II, Oxford: Clarendon Press, 1989.

Heubeck, A., (Fernandez-Galiano, M. and Russo, J.), *A Commentary on Homer's Odyssey* III, Oxford: Clarendon Press, 1992.

Levine, Daniel B., "Homeric Laughter and the Unsmilimg Suitors", *CJ*. 78 (1982), 97-104.

March, Jennifer R., *The Creative Poet, BICS* Supplement 49 (1987).

Marg, W., "Das Erste Lied des Demodokos", *Navicula Chiloniensis: Festschrift F.Jacoby*, Leiden: E.J.Brill, 1956, 16-29.

Nazy, Gregory, *The Best of the Achaeans,* The Johns Hopkins University Press, 1979.

Newton, Rick M., "Odysseus and Hephaistus in the Odyssey", *CJ* 83 (1987), 12-20.

岡　道男、『ホメロスにおける伝統の継承と創造』、創文社、1988.

Olson, S. Douglas, *Blood and Iron, Stories and Storytelling in Homer's Odyssey, Mnemosyne Supplement* 148, Leiden: E.J.Brill, 1955.

-----"Odyssey 8: Guile, Force and the Subversive Poetics of Desire", *Arethusa* 22 (1989), 135-145.

Pearson, A.C., *The Fragments of Sophocles*, vol. I & II, Cambridge University Press, 1917.

佐野好則、「『オデュッセイア』における木馬の物語」、『西洋古典学研究』XLVII, 1999.

Schadewaldt, Wolfgang, "Kleiderdinge, Zur Analyse der Odyssee", *Hermes* 87 (1959), 13-26.

Stanford, W.B., *The Odyssey of Homer*, vol. I& II, London: Macmillam, 1967.

Thalmann, William G., *Conventions of Form and Thought in Early Greek Epic Poetry*, The Johns Hopkins University Press, 1984.